研究発表

徳山地方の埋蔵文化財

会員　小川　宣

徳山地方には、縄文・弥生時代の遺物・遺跡はあまりみられない。縄文時代は黒髪島から遺物が出土しているにすぎない。弥生時代は久米・加見・中野・金剛山等で遺物・遺跡が発見されていることから、山麓・丘陵地帯にまず人が住みはじめたと考えられる。

古墳時代に入ると、しだいに平野部に農耕域を拡大したと思われる。特に下松市境の末武川右岸・久米川下流域付近の丘陵に多くの古墳がみられる。すでに消滅したものもあるが、岡原・天神山麓・向原・日天寺古墳などである。

徳山地方の埋蔵文化財の中で注目すべき遺物・遺跡のいくつかを紹介すると

1.　黒髪島大谷遺跡（新南陽市黒髪島大谷）

徳山地方では旧石器時代の文化遺物はまだ発見されていない。縄文時代の遺物も極めてわずかで、はっきりしているのは黒髪島の遺物だけである。黒髪島からの出土品は、石器では石斧5・打製の石槍1・特殊な形態をした変形石匙2・石鏃1などである。石斧の中には薄手で全面をていねいに磨いた形のととのった美しい石斧があり、縄文時代のものと思われる。その他出土した石の破片などから姫島産だと推定され、その当時の交易の範囲を知る手がかりになる。

石器のほかに連点文をつけた凸帯をめぐらした縄文式土器の小破片3個出土している。遺物散布地は波打際で、波にあらわれて磨滅している。後背には花崗岩の岩山がすぐ迫っており、海底遺跡だと推測されている。

その他、弥生式土器や土師式土器も出土しており、近くの仙島からは弥生時代の石器や土器が発見されており、さらに古墳時代になると仙島から銅鏡が出土し、竹島の御家老屋敷古墳とあいまって徳山湾に点在する島嶼遺跡として大へん興味のあるところである。

縄文時代の磨製石斧（黒髪島出土）

2. 老郷地遺跡（久米老郷地瀬戸の口）

徳山地方では、はじめて発掘された弥生時代の三つの住居址であるが、調査の上、今は消滅してしまっている。

一号住居址は、弥生時代後期終末から土師期への移行期を主体とした小部落の遺跡である。遺存していた住居址は、丘陵末端の尾根に立地し、土地の高い側を円形に五二㎝ばかり切り下げて平担にし、この平担面をさらに一〇㎝余り掘り下げて隅丸方形の床面をつくり、ほぼ中央部に大きな炉を設けた半竪穴式住居址である。推定復原形の直径は約五・八五ｍで、炉跡は大きくて長径約一ｍ、短径七七㎝、深さ二六㎝で中央のやゝ北寄りに設けられている。

二号住居址は、楕円形の半竪穴住居址である。住居址の西北側を約三〇㎝ばかり掘り下げて平らな床面とし、床面の縁には断続的に浅い周溝が掘られている。住居址の大きさの推定は、長軸約八ｍ、短軸約六ｍばかりのかなり大きな住居である。炉跡は一個で長径約七〇㎝、深さ三〇㎝で中央部に掘られている。

三号住居址は、方形系統の竪穴式住居址で後から二号住居址によって掘りとられたようである。建てられた時期は二号住居址よりも古く、出土した土器から弥生時代中期の末から後期の前半と思われる。

これらの住居址は、老郷地丘陵の末端部に立地する弥生時代の後期から古墳時代初頭への過渡期を主体とする村落址で、その大部分が失われ、わずか三個の住居址が残っているにすぎないことが明らかになった。遺物には石器がなく利器はすでに鉄器に交代していることを示している。

この遺跡は、標高五〇ｍの所にある高地性集落ではないかと思われる。この時期は、経済的、政治的利害をめぐって、集団（ムラ）間の争いと統合が大規模になり、西日本全体が戦乱状態にあったと考えられる。高地性集落は、この戦乱の際のとりで、見張り場、逃げ城だと考えられている。

一方、このような水田に適しないような高い所にどうして集落が営まれたかについて、弥生時代中期になって人口が増加するにつれて山地で畑作農業を営むものが多くなったからとも考えられている。

3. 天王山古墳（徳山市上村川本）

徳山地方では唯一の弥生時代の石棺。かつては標高五〇ｍの山麓にあったものを動物園展示場に移転したが、現在この展示場の所に文化会館建設中で別な所に保管してある。

大へん簡単な組合式箱式石棺で、割石を使用した原始墓である。妻石が側石の外側にあるのが特徴で、大きさは縦一・九ｍ、幅約五〇㎝、深さはおよそ三〇㎝である。

4. 御家老屋敷古墳（新南陽市富田竹島）

周南地方では数少ない古墳時代前期の前方後円墳で、内部主体は竪穴式石室である。墳丘の大きさは、長さ五八ｍ、後

第１号住居址（老郷地遺跡）

円部の直径四〇m、高さ七m、前方部の前端二八mである。

現在保存されている副葬品は、三角縁神獣鏡など鏡三面、銅鏃二六個、鉄剣、太刀、鉄斧などである。この中で注目されるのは鏡である。

劉氏作神人車馬画像鏡には、かなりはっきりした陽鋳で「質明如日月佳旦如上有東王父西王母」と記されている。

天王日月銘四神四獣鏡は、京都大塚山にある獣文帯四神四獣鏡（径二二・三㎝）の同笵鏡で同じものが神奈川県の白山古墳にある。「天王日月」の銘が外向に八個所入っている。京都大塚山からは、三六面の鏡が出土し、その中十九種二四面の同笵鏡が各地の古墳から出土している。したがって、大塚山の古墳の被葬者が当時の大きな政治的勢力をもっていたことは間違いなく、この古墳の同笵鏡のある古墳は、それぞれその地方の最古、最大に属するものが多い。したがって、御家老屋敷古墳の被葬者は、中央政権と関連をもった有力な地方豪族だと推定される。

三角縁神獣鏡は、五九個の破片に別れ、緑青も極めてひどかったので、これまで文字のあることには気がつかなかった。最近になって、文字のあることがわかり、正始元年という魏の国の年号が判読できた。正始元年というのは、西暦二四〇年で、この当時の日本のことを記した有名な「魏志倭人伝」によると邪馬台国の女王卑弥呼が魏の景初三年（西暦二三九）に朝貢して「親魏倭王」という称号と金印・鏡百枚を授けられた。そして翌年の正始元年に、魏の統治下にあった朝鮮半島の帯方郡から太守が鏡をもって邪馬台国を訪れたことになっている。この度の鏡はこの時の魏王のプレゼントの一つではないかと考えられる。もし卑弥呼から与えられた鏡だとするとこの古墳に埋葬された人物とは一体どういう人物なのであろうか。

古墳の分布状態から推定して、西日本にはかつて出雲文化・吉備文化・筑紫文化・肥後文化が展開したことになっているが、この度のことを背景とした御家老屋敷古墳・宮ノ洲古墳・茶臼山古墳・白鳥古墳等と更に石城山の神籠石を加えて考えてみるとき、周防文化ともいうべきものが存在していたのではなかろうか。

5. 耳取古墳（徳山市久米耳取）

日天寺古墳群の一つで、前方後円墳で六世紀初頭のものである。全長およそ二〇m、後円部径およそ九m、前方部幅およそ一〇mある。内部主体は横穴式石室のようである。

埴輪列は、標高およそ九〇mの前方部に横だおしの状態で発見された。一m前後の間隔で墳丘の裾の部分に立並んでい

都濃郡，下松市，徳山市，新南陽市主要遺跡分布図

たと思われる。器高五〇㎝前後の埴輪が主で、須恵質の埴輪と朝顔型の埴輪がそれぞれ一つある。

須恵質の円筒埴輪の口縁部三〇㎝、底面径一九㎝、器高四七㎝、器壁の厚さ二～三㎝で口縁部は大きく外反して、外側に円文が刻まれ、円筒部に二条のタガがめぐらされている。基部と中段に二孔一組の透し孔がある。山口県では埴輪のある古墳はめずらしく、周南地方ではこの古墳だけである。

6. 宮ノ洲古墳（下松市宮ノ洲）

陸繋砂州の上にあった古墳で、享和二年（一八〇一）に発掘、その後二回調査したという。内部主体は礫床をもつ割石小口積の竪穴式石室で、漢式鏡四面、鉄鏃、鉄斧、土師器が出土している。鏡は盤龍鏡一面、三角縁神獣鏡二面、内行花文鏡一面で国指定重要文化財として東京国立博物館に保管されている。その中で盤龍鏡は面径二五㎝、重量約二㎏で鏡背に帯銘があり、魏晋間の王氏作と推定されている。

7. 伝堂山古墳出土家形石棺（神上神社）

神上神社の境内に本体と蓋石とが少し離れた所に別々におかれている、堂山古墳出土と伝えられているが、この古墳の所在は不明である。古墳時代後期のもので、何時頃今の所に置かれたかについても不明である。

この家形石棺は、平野石を原材として用い彫ったもので、「ノミ」のあとが明かに認められ、製作技術の一端を知ることができる。石棺の大きさは、外側が縦一・五m、横七二㎝彫ってある部分は縦一・一九m、横三四㎝、高さ三八㎝である。この大きさから判断して幼児を伸展葬で葬ったものと考えられる。周南地方では唯一の家形石棺で大へん貴重なものである。

8. 向原一、二号古墳（久米塚穴）

一・二号古墳とも古墳時代後期のもので、円墳で、内部主体は横穴式石室である。ともにすでに発掘され、一部は破損しているが、ほぼ原形をとどめているので徳山市域で現存する古墳として極めて大切なものである。

ともに標高六〇*m*の丘陵の突端にある。一号墳は、直径八m、高さ約二mの円墳で、盛り土の版築の状況をうかがえる部分がある。石室の後部が破壊されているので、そこから石室に入ることができる。羨道は両袖である。

二号墳は、直径約一〇m、高さ約二mの円墳の盛り土があったと推定されるが、頂上部分は盛り土がなくなり天井石が露出している。少し地面を掘り下げて石室を造る半地下構法のようである。羨道は片袖で、羨道の入口が破損しているので、そこから石室に入ることができる。徳山市域では最大の石室で、石室の奥行八・六五m、高さは高い所で二・五五m、幅約二mある。

（昭和五七年三月一四日例会発表）